



キャリアの話を聞こう ⑮

同時通訳者

佐々江信子



ささえ のぶこ 青山学院大学文学部英米文学科卒業。米ペンシルバニア大学大学院教育学修士号取得。海外技術者研修協会の常勤通訳を経てフリーランスの通訳に。総理大臣の外国訪問の記者会見や閣僚会合のほか、さまざまな政府間交渉や国際会議での同時通訳を行う。夫の賢一郎氏は、外交官として外務次官、駐米大使などを歴任。ワシントンでは大使夫人として「ノブコ・フォーラム」を主宰し、日本の幅広い人的交流をコーディネートした。

ワシントンで考えた「女性と仕事」

通訳として、大使夫人として

通訳として第一線で活躍する一方、駐米大使夫人としてワシントンで「ノブコ・フォーラム」を立ち上げるなど、独自の活動が目立った佐々江信子氏が、仕事への思い、そしてワシントンでの挑戦の意義などを語る。

【聞き手】本誌編集委員 田中淳子

——今年三月、大使夫人としての役目を果たされ、五年四ヵ月ぶりに帰国されました。

佐々江 無事に終えることができて、安堵しました。それまでは通訳という裏方の仕事をしていて、パントスーツに

重たい書類を抱えて走り回るような生活でした。それが大使夫人となると、「表」の仕事が主となるので、不安も大きかったのですが……。ワシントンを発つときに思い返してみると、自分がこの間、非日常の世界にいたような気が

して、不思議な気持ちになりました。

通訳をめざして单身渡米

——なぜ通訳を目指されたのですか。

佐々江 私の祖母は正和にかけて女性解放運動に関わった人でした。それを間近に見ていた母は、自分の子どもは一人でも生きていけるように、手に職をつけさせたいと考えていたようです。私は三人姉妹の末っ子ですが、一番上の姉はピアニスト、二番目は医師になりました。

私が通訳を志したきっかけは、一九六九年のアポロ11号の月面着陸でした。NHKは同時通訳つきの衛星中継でこの歴史的瞬間を放映し、当時中学生だった私は、英語が即座に日本語に変換される映像を見て、通訳に憧れました。

——早くから勉強を始めたのですか。

佐々江 高校時代はフエンシングに明け暮れていて、勉強を始めたのは大学入学後です。帰国子女でもないのに、毎日コソコソと英語学校に通いました。

通訳は英語を熟知するだけではだめで、話し手の意図を瞬時に理解して日本語に置き換える能力が求められます。私の場合は、英語以上に日本語の内容を必死に勉強しましたね。無知だったので、まず自分の知識を増やし、同時に

できるだけわかりやすい言葉に置き換える練習を重ねました。

——その後、単身で米国に留学されます。

佐々江 ペンシルベニア大学大学院に一年間留学しました。幸い学位は取得できましたが、日本とは異なる生活環境のなかで苦労や試練もありました。でも沢山のことを学んだと思います。

——しかし通訳の夢は見事に実現させましたね。

佐々江 たまたま通訳を募集している団体が採用してくれました。そこからはオン・ザ・ジョブ・トレーニングです。とにかく場数を踏んで学びました。

——首脳会談や国際会議など、数々の大舞台で通訳を担当されました。特に印象に残る場面や人物はいますか。

佐々江 よく聞かれるのですが、なかなか思い浮かびません……。私は、通訳するときには、話し手の社会的立場に左右されず、誰とでも同じ気持ちで仕事をしたいと思っています。もちろん閣僚会合のようにメディアから注目される舞台は緊張しますし、準備にも時間をかけます。ただスピーカーに対する尊敬や愛着は全く別のものです。地道に研究を続ける研究者の話に感銘を受けることもしばしば。ただ、ダイアナ妃の通訳を務めたときには周囲からすごく

羨うらやままれました（笑）。

迷った末に「大使夫人」を決断

——ご主人との出会いは？

佐々江 彼との出会いは、私がまだ通訳業を始めたばかりで、仕事で四苦八苦していた頃でした。米国留学から帰国して間もなく、共通の友人に紹介されたのがきっかけです。彼もフィラデルフィアに留学経験があり、外国での生活の苦労など共感するものがお互いあったんでしょうね。なんとその日に結婚を申し込まれました。

——ドラマチックですね。

佐々江 主人は「あの時は猛烈に忙しくて、きつと疲れてたんだよ」と言っています（笑）。

結婚で一番心配だったのは、自分の仕事がどうなるかでした。せっかく始めた通訳の道が続けたいという思いがある一方で、当時は女性が結婚すると仕事を辞めるのが一般的でした。そこで、恐る恐る主人に尋ねてみると、意外にも「ぼくは帰りが遅いから、家で君に待っていられると困るよ」と言ってくれて。嬉しかったですね。

ただ、仕事のかたわら育児もあり、振り返ってみれば体力勝負の日々でした。子どもを寝かせると、疲れているの

で自分も一緒に寝てしまふんです。夜中に目を覚まして翌日の仕事の予習をして、明け方に少しだけ寝る、という生活で……。仕事面白かったからこそ続けられたのだと思います。

——賢一郎氏が駐米大使に就任された際、一緒にワシントンに赴任することに迷いはありませんでしたか。

佐々江 大いに迷いました。米国赴任ともなれば、大事にしてきた通訳の仕事は犠牲にしなくてはなりません。他方、主人にとって、駐米大使という仕事は外務省での最後の仕事になることも、わかっていました。ワシントンの外交は、夫婦が揃っているほうがやりやすいだろうとも思いました。そもそも通訳として裏方の仕事をしてきた私に、その任が務まるかどうか……等々、考えが堂々めぐりしました。主人も、私が仕事から離れる辛さをよく理解していたので、悩んでいたようです。最後は、なんとか両立の道を探れるかもしれないと思い直し、やや悲壮な気持ちで米国に向かいました。

——結果的に両立されたわけですね。

佐々江 仕事の量はずいぶん減りましたが、むしろ自分に発破をかけるように、荷の重い仕事を選ぶようにしました。日米財界人会議や総理の記者会見、日米の知的交流の

場である「富士山会合」にも通訳として立ち上げから関わりました。なかでも緊張感があつたのは環太平洋パートナーシップ（TPP）協定の閣僚会合です。TPPは、乳製品から電気通信まで分野が幅広く、各国の法律の知識も必要で、とにかく準備が大変でした。妥結したときには他人事ながら喜びも人一倍だったのを思い出します。それだけに、その後米国が離脱したときは落胆しましたが……。

——大使夫人としての経験はいかがでしたか。

佐々江 主人は何度か海外に赴任していますが、大使館勤務は若い頃の在米大使館の一度だけでした。当然、私の大使館経験も一度だけ。だから腹をくくって、できないことはできないと諦めて、とにかく大使公邸にいらつしやるお客様と仲良くすることだけに努めました。五年四ヵ月を経て、皆さんに送別のレセプションを開いていただいたとき、自分のミッションは「メイク・フレンズ」だったと総括したほど、多くの友人に恵まれたことは、感慨深いものがありました。

——人脈も重要な外交資産です。ワシントンでは「人間関係がすべて」と言う人もいます。

佐々江 ご指摘の通り、ワシントンは人とのつながりが何よりも大事な街です。だからと言って最初に外交目的あり

きでは、友情は生まれません。一緒に食事をしながら、ある瞬間に心の琴線が触れ合うような話になり、友情が深まったと感じるときは掛け値なしに嬉しい瞬間でした。その結果として、個人的な関係が思いもよらない展開を生んで、日米関係の基盤を強くする——そういったケースは何度か経験しました。

「フブコ・フォーラム」を立ち上げる

——大使夫人は、どのようなスケジュールで動くのですか。

佐々江 標準的には、昼と夜、一日に二つぐらいのスケジュールが入ります。昼は女性関係の行事も多いですね。夜はイベントを主催して、大使をはじめ大使館の皆さんと一緒に、公邸でゲストの皆様をお迎えします。音楽会や日本の文化行事、物産展などを開催する機会が多くありました。その他に少人数の夕食会も頻繁に開きます。公邸での予定がない日には、お招き頂いたイベントに出かけます。シンポジウムや講演に呼んでいただくこともありました。

——女性同士のつながりが持つ意味も大きいと思います。

佐々江 ワシントンならではの、女性たちが夫のポジションをベースに独自のクラブを作り、ネットワークを作っています。そこで各国の大使夫人のみならず、閣僚、



ワシントンでの「ノブコ・フォーラム」最終回では、ケネディ前駐日米国大使がスピーカーとして登壇した

議員、政権幹部や関係者、マスメディアなど多様な方々の夫人たちと、つながりを得ることができました。夫人同士が親しくなつて夫婦間の交流に発展することもあります。皆さんとてもバワフルで、プロフェッショナルとしてそれぞれの分野で活躍する方も少なくありません。米国では女性が自分の仕事や活動領域を持つことを尊ぶ空気があります。それだけに魅力的な女性が多く、大いに刺激を受けました。

——佐々江さんは、各国大使夫人のあいだでリーダー的な存在でした。

佐々江 任期が長かったせいでしょう。ただ、せっかくたくさん素敵な女性たちと友人になれたのだから、それを個人の財産にとどめるのではなく、ネットワーク化できればと考えるようになりました。そこで生まれたのが「ノブコ・フォーラム」です。

——いつ頃から構想されていたのですか。

佐々江 ワシントンで生活し始めて三年ぐらいいしてからでしょうか。自分が仕事を大切にしていくこともあり、女性が働くこと、あるいは女性の生き方というテーマにはもともと関心がありました。大使館では大使をはじめ多くのスタッフが日米関係の発展のために日夜努力を重ねています。私は政治的なことには立ち入りませんが、大使公邸にワシントンの女性たちが交流する場をつくることは、日米友好にも役立つのではないかと思います。その意味でノブコ・フォーラムは、自分のこれまでのキャリアと大使夫人という新しい役割とが重なり合うものでした。

——具体的にはどのように運営されたのですか。

佐々江 毎回二名ずつ、政治・外交・ビジネス・文化などあらゆる分野から女性リーダーをお呼びして、私がモデレーターとなり議論していただきました。スピーカー同士あるいはフロアを交えた議論は、たいへん刺激的でした。

NBCの敏腕記者アンドレア・ミツチュエルさん、ブッシュ（子）政権で労働長官、現在はトランプ政権で運輸長官を務めるイレイン・チャオさんなども登壇してくれ、最終回のスピーカーは、キャロライン・ケネディ大使でした。

フォーラムの一番の特徴は、登壇者に自らのライフ・ストーリーを語ってもらうことでした。政策や政局は私の領域ではありませんし、ワシントンにはいくらでも議論の場があります。そうではなく、自分がこれまでどうやって生きてきたかを、若い人たちへのメッセージを含めて伝えてもらいました。

——聴衆にはどのような方がいらつしたのですか。

佐々江 当初は国際機関で働いたり、大学などで研究する若い日本人女性が多かったのが、次第に多国籍になってきて、最後は半分以上が外国人でした。ただ、日本人女性に積極的に発言を促しました。これまで遠い存在だった女性リーダーの人生に触れることでキャリアへのヒントを得たり、参加者間で温かな関係を育むきっかけになつていけば何よりです。そういうえば、いつの間にか男性の聴衆も増えました（笑）。

私自身にとつても、女性リーダーたちの生きざまや人生哲学を聞いて大いにエンカレッジされたのと同時に、表面

的にはわからない米国社会の深いひだのようなものを理解できて、たいへん勉強になりました。

——今後はどのような活動をお考えですか。

佐々江 ノブコ・フォーラムは、私にとつて新しいチャレンジで、この歳になつても新しい学習や成長ができるんだという発見もありました。自分のライフワークとして日本でも続けていけたらと思います。

——「ノブコ・フォーラム・ジャパン」ですね。

佐々江 マルチ・ナショナル、マルチ・セクトラル、マルチ・ジェネレーションに、人生に目標を持っている人たちで集まつて議論していく場にしたいですね。

——若い人たちにメッセージをお願いします。

佐々江 外国で生活してみると、思っている以上に日本の評価が高いのに驚きます。ソフトパワーもあります。もつとあればいいなと思うのは、個人の発信力でしょうか。国や組織に頼らず、誰もが振り向いてしまうような個の力、チャームをもつと発信してほしいと思います。そのためには外の世界に出ていって、自分を試して、自信をつけることが必要なのでしょう。現状の「コンフォートゾーン」から出る勇氣を持つて世界にチャレンジして、と伝えたいと思います。●